

# 評価で | どのように見取ればいいのか？ / “困っていること・工夫していること”



埼玉県和光市立第五小学校  
教諭 古見 豪基

千葉大学  
教授 土田 雄一

筑波大学附属小学校  
教諭 加藤 宣行

東京都文京区立柳町小学校  
教諭 加納 寛子

**【土田】** 2018年度より道徳科の評価が始まりました。記述での評価は客観性に乏しく、教師の主観が中心になるのではないかなど危惧されています。評価にあたり、まず、校内や個人でどのような準備をされたのか、どのような課題があったのかなどお伺いしたいと思います。

## 評価にあたって、どのような準備を？

- 【加納】** 私の学校では、年度当初の校内研修の場で、
- 予め管理職と校内の教科部で相談して決めた評価の仕方について学校の方針を説明する。(学期の全てで行うこと、1・2学期は顕著な学習の状況を書き、3学期は大きくくりな評価を書くといった内容に関すること。)
  - 評価に関する校内研修をすること。

といったことを全体周知し、道徳の評価をするためにも、児童情報の蓄積を学年で統一して進めていくように説明しました。

**【古見】** 私も校内の先生に、記述式での評価のために、子どものノートやワークシートは残しておくように年度初めに伝えました。また、県(埼玉)教育委員会からも文例集が出されていることを紹介しました。

**【加納】** 私は加藤先生の評価の書籍\*や道徳関連の講演会で学んだことをもとに、普段の授業の子どものノートから、1・2学期は顕著な学習の状況を先行して書きました。そして、記述の仕方や内容をモデルとして示し、校内の先生方に進めてもらうようにしました。

## 「大きくくり」の評価って、どうするの？

**【土田】** 大きくくりの評価とは、いわゆる全体をまとめて評価する「総括的評価」ですね。1時間ごとの「形成的評価」と違って、どのような評価の仕方を考えていますか。

**【古見】** 子どもの伸びしろを評価してあげるなので、例えば同じ価値項目でも、4月よりも7月に行ったときの方が、理解が深まっている言葉を使っているとか、多面的・多角的にとらえられているという成長の度合いを意識して、その部分を見取ってあげるようにしました。それから、道徳の学びを実際の生活の中でも体験させることを子どもたちにやらせているので、そこで気づいていることも評価して、やる気を起こさせるような言葉かけを記述したりしました。

**【土田】** 大きくくりの評価では、道徳の授業だけでなく、道徳で学んだことを実際の生活の中でも生かすようなことに対する評価をしたということですね。

## 道徳で子どもに言葉かけしたい内容は？

**【土田】** 「ワンペーパーポートフォリオ」といって、1枚の紙に子どもたちの振り返りを書かせて、教師が必ずそれにコメントを入れる。そのコメントを見て、再度、子どもたちに振り返りを書かせる(リフレクション)という道徳評価の取り組みをしている学校があります。教師のコメント後のリフレクションが深まったことが発表されています。つまり、**教師と子どもとのやり取り(キャッチボール)が、子どもの成長に関与する**のではないかとことなのです。

**【加藤】** それは、「指導と評価の一体化」という点から見てもその通りだと思います。私は子どもたちのノートにコメントする際は、以下の3つの観点で書きます。

- 「意味づけ」：子どもの考えの道徳的な価値づけ
- 「問い返し」：思考をつなげて発展させるための投げ返し
- 「発展的示唆」：学びを生活につなげるための見通し

**【土田】** 「道徳教育」という視点では、子どもが生活の中で変容していくことの評価は大切ですが、「道徳科の評価」という点においては、道徳科という時間の中で子どもの変容を見とることが中心になるということですね。

## 発達段階(学年)による評価の違いは？

**【古見】** 低学年に気持ちを書かせる場合は、記号とかニコちゃんマークとか、色を使わせるなど、ある程度選択肢を用意して評価してあげるという手立てが必要かと思っています。子どもたちの具体的な言葉での表現というところは、「座席表」などに担任が授業をしながら書きとるといった作業を重ねるしかないと思います。

**【加納】** 特に低学年は、子どもの変容が道徳の学びを通してのものか、純粋に学校に慣れてきた要素から変容したものなのか、という判断が難しいと感じます。生活での成長的な部分を記述しようとする、教師の主観が少なからず入って客観性がどれほどあるのか不安に思います。特に1年生は記述自体が難しいので、子どもたちの生活の様子から見取らざるを得ない部分もあると思います。

**【古見】** 高学年になればなるほど自覚が伴い、自己評価できるようになると思います。毎時間ではなく、学期の終わりなどにリフレクションさせて自己評価させました。

**【土田】** 「自己評価」は低学年では難しいでしょうから、高学年で重視していくことになると思いますね。

## そもそも「道徳の評価」って？

**【土田】** 道徳の評価は、「励まし伸ばす個人内評価」といわれます。学級担任には、子ども理解(よさや苦手な面)がベースにあるので、それを生かせば、その子へのサポートや助言が変わってくると思うのです。そして複合的な視点で子どもがどう変化したのか見取っていくことが、大事な評価になってくるのだと思います。

**【加藤】** あくまでも個人内評価のため、一人ひとりの育ちを見取ってあげる必要がありますよね。それと同時に自己評価能力も育てたいので、教師は目に見える根拠のある評価(言葉かけ)を一人ひとりにして、子ども自身が自分の変容を自覚できるようにすることが大事です。その言葉をいかに多くもてるかということですね。

**【土田】** 教師も子どもを見取っていくけれど、子ども自身も自分で考え、さらに教師からの助言・サポートによって自覚し、成長していくということですね。

**【加藤】** 子どもの成長を見取るためには、「道徳ノート」が必要だと思っています。光文書院の道徳教科書の巻末には、子どもたちが「学びの足あと」を書くことができ、それが蓄積できるようになっているので、子どもたちにも学びを振り返らせて評価に生かせると思います。

**【土田】** 個の成長のプロセスが、一人ひとりの記述内容の違いに出てくる必要があるということですね。

**【加藤】** はい。同じ授業でも子どもによってまるっきり違うノートになってくると、一人ひとりの思いや大事にしたいところを具体的に拾っていくことができます。**ノートを見れば、その子どもの顔が見えるようになってくる**ことが理想だと思います。

## 道徳評価の2つの視点は？

**【土田】** 文科省からは、評価の観点として、「多面的・多角的な見方への発展」と「(道徳的諸価値の理解について)自分自身との関わりの中での深まり」とありますが、そのあたりはどのように捉えていますか。

**【加納】** 多面的・多角的な見方ができているかどうかは、友達の意見から自分の考えをもつ姿、以前の授業と比較して価値のとらえ方が変わったことに気づく姿などで評価できるかと思っています。

**【古見】** 例えば「思いやり」は具体的に手を差し伸べることだと思っていたが、見守ることも思いやりだと思ったなど、認識の広がりなどが見取れると、多面的・多角的

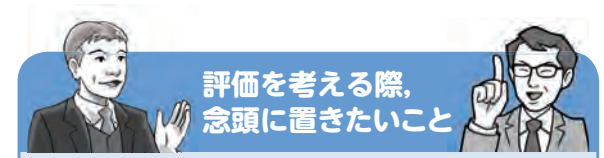
な見方が評価できるのではないかと思います。また、高学年などでは、「人のために」という視点で委員会の仕事などをするようになったというような行動評価もできると思います。

**【加藤】** 授業の中である子どもの意見を取り上げて、「そういう見方もあるね」と言葉がけてあげると、他の子どもたちにも多面的・多角的な見方を広げてあげることができます。6年生などには、「自分たちが1年生のとき、6年生がしてくれたことから考えよう」と言葉がけすれば、自分の経験を通して考える見方などもできるようになります。

**【土田】** 自分自身との関わりの中での深まりという点の評価についてはいかがですか。

**【加納】** カリキュラムマネジメントも意識して、道徳の学びの内容と他教科や学校行事などの教育活動との関連を意識して授業を進めることで、子どもたちが道徳の学びを自分自身との関わりにつなげやすくなる場合があると思います。

**【加藤】** カリキュラムの検討も含めて、発展的に授業の後のことも見通す必要はあると思います。「道徳科の授業」と「道徳教育」との2本立ての中で、道徳科の授業がどれだけ深められて多角的・多面的な見方ができるようになるか、生活経験と授業をつなげて考えていく中で、どれだけ自分自身との関わりで考えられるようになるかということになるのかと思います。



評価を考える際、**念頭に置きたいこと**

**【土田】** 子どもを評価するために大切なのは、教師が子どもの変容を見取ることと、関わりを通して子どもの成長に関与していくことです。子どもの成長のプロセスにどう関わるかを忘れてはいけません。

**【加藤】** 評価するためには子どもの変容をきちんと受け止めることが必要で、そのためには、「子どもの変容を促す授業をする」ということです。授業の中で子どもの変容を子どもに返しながらか、教師は教師自身の授業評価をきちんとしていく必要があると思います。こうした授業を積み重ねて、複数時間で見てくる部分が大きくくりの評価となると思います。